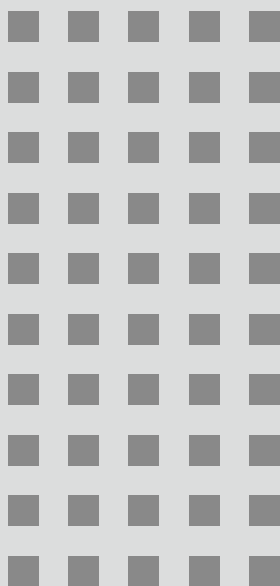


第 3 章

建築学科学生の記録



3-1. 入学・卒業(修了)者数

■ 工学部第一部・第二部 工学研究科修士・博士課程 入学・卒業(修了)者数

公式記録による、入学生、卒業・終了生の人数の変遷である。

「入学は易しいが卒業は難しい」という「物理学校の伝統」が常識的に語られて来たが、建築学科発足時には既にそういう時代ではなく、初期から倍率の高い難関校であった。しかし2年次進級の関門や卒業研究履修条件が厳しく運用されていた事もあって、入学後の留年(原級)率がかなり高い時代もあった。1970～80年頃には4年間で卒業できた学生の比率が入学生数の半数以下であったこともある。ただしこの表からは、学生の在籍年数(何年かかって卒業したか)は分からない。

	年度	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968	1969	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984
		S37	S38	S39	S40	S41	S42	S43	S44	S45	S46	S47	S48	S49	S50	S51	S52	S53	S54	S55	S56	S57	S58	S59
第一部	入学	91	122	102	105	189	94	105	102	93	88	104	92	90	92	88	91	86	100	97	93	95	90	96
	卒業				79	96	98	86	166	94	89	83	94	87	79	75	77	79	69	70	108	81	86	71
		募集定員 40				募集定員 80				募集定員 60				募集定員 80										

	年度	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968	1969	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984
		第二部	一般入学														32	30	33	27	23	17	20	18
	推薦入学														68	70	81	68	67	70	72	67	67	
	一般編入																4	7	4	3	4	4	3	
	推薦編入																						4	
	卒業																	16	56	68	55	57	38	

	年度	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968	1969	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984
		修士	入学				2	4	9	5	9	14	11	3	11	13	18	12	7	12	6	13	18	14
	修了					2	3	10	5	7	12	13	3	8	11	22	13	6	13	6	13	16	14	
		募集定員 5																						

	年度	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968	1969	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984
		博士	入学																					0
	修了																							
		理工学研究科に博士課程設置													初の博士(理工学研究科)			2人目の博士(理工学研究科)		募集定員 3				

残念ながら途中で退学していった学生も少なくない。仮面浪人というケースもあるが、建築学科に合わず進路変更する例もあり、単位が全く取れずにそのまま消えていく学生もいた。在学8年の制限が出来てからは、その年限の制約で「満期」退学する例もあったが、7～8年目になると不思議と単位を取得して卒業するケースもあった。

入学者数は学校基本調査(5/1現在)に拠る。卒業・修了者数は卒業・修了年度(標準的には表記年の翌年3月卒業・修了)を示す。工学部第二部の編入には2年次と3年次の編入があるので、入学者の合計は出せない。

	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012							
	S60	S61	S62	S63	H1	H2	H3	H4	H5	H6	H7	H8	H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24							
	107	98	115	110	112	104	97	105	126	100	123	90	91	105	132	131	96	135	94	93	90	111	112	113	116	94	98	111							
	72	82	83	99	94	98	91	117	104	81	102	118	96	113	86	89	88	111	116	100	120	100	81	91	99	110	100	108							
	募集定員 90																募集定員 89			募集定員 88		募集定員 87		募集定員 86		募集定員 85		募集定員 80		九段校舎へ移転			募集定員 90		

	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
	49	43	63	48	35	54	41	25	32	40	43	42	47	36	34	37	45	40	44	44	45	54	52	65	43	56	58	60
	73	72	74	71	59	53	49	46	50	43	36	40	52	53	48	50	52	35	37	37	37	37	36	30	34	25	21	20
	1	4	4	2	1	3	1	2	8	10	10	11	4	7	5	1	4	2	4	4	4	2	1	4	0	7	15	3
	3	3	6	7	5	7	7	13	13	23	23	16	21	25	19	27	40	48	38	30	38	38	27	18	31	26	24	18
	42	58	63	80	73	87	103	73	79	79	96	99	96	84	89	80	82	80	93	85	73	80	79	87	88	74	76	74

	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
	19	17	20	23	26	29	25	24	27	28	20	28	43	42	44	50	45	38	35	43	40	40	27	38	45	53	42	58
	14	17	15	18	22	26	28	26	24	27	28	20	27	39	43	41	51	39	38	34	43	36	41	27	35	44	51	39
	募集定員 15				募集定員 25				募集定員 40																			

	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
	1	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	0	2	2	0	1	1	2	1	1	0
	0	0	1	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	0	1	1	1	0	0	1	1	0	0	1	0	0
	初の博士(工学研究科)																											

3-2. 建築学専攻・博士学位取得者

建築学専攻で博士学位を取得した者のリストである。本学建築学科出身でも他大学大学院で学位を取得した者は掲載していない。

工学研究科に博士課程が設置されたのは1983(昭和58)年度からであり、それまでは1974(昭和49)年度設置の理工学研究科博士課程所属(工学研究科の指導教員が理工学研究科に所属する)という形を取っていた。したがって、リストの最初の2名(表中*1印)は理工学研究科での学位授与となっている。

博士の学位には甲(課程博士)と乙(論文博士)がある。学位の区分上は論文博士であっても、博士課程を満期退学した後に学位取得して、課程博士に準ずる者については、表中「論文博士*2」として区別してある。

大学院博士指導教員の資格の問題から、実質指導者が論文審査の主査になれない場合は、実質指導教員(確認できた場合)を併記した。

No.	氏名	授与年度	種別	博士論文名	指導者 (実質指導者)
1	村田俊二	1979 (S54)	課程博士*1	インバルス性音源を用いた斜め入射吸音特性に関する実験的研究	幸田
2	石川孝重	1981 (S56)	課程博士*1	合成梁の挙動にスタッドコネクタが及ぼす影響に関する研究	平野
3	山岸良一	1987 (S62)	課程博士	視覚的空間評価尺度に関する研究	久我(内田)
4	穂積秀雄	1987 (S62)	論文博士	骨組および床板つき骨組の塑性崩壊に関する組織的解法	平野
5	福山 洋	1989 (H1)	課程博士	鉄筋コンクリート部材におけるひびわれ発生域の抵抗機構に関する研究	松崎
6	高田博尾	1990 (H2)	論文博士	大型ハーフPC合成床板構法の開発と実用化に関する研究	井口(松崎)
7	湯 懐鵬	1993 (H5)	課程博士	室内環境における微生物粒子による空気汚染防止に関する基礎的研究	吉澤
8	和泉信之	1994 (H6)	論文博士	鉄筋コンクリート造壁柱・はり接合部の耐震性能に関する研究	松崎
9	布田 健	1994 (H6)	課程博士	階段使用上の観点より見た階段各段の視認性の定量化に関する研究	直井
10	柴田克彦	1999 (H11)	論文博士	空調設備の性能監視による異常の検出と原因の診断技術の実用化に関する研究	吉澤
11	飯野由香利	1999 (H11)	論文博士	児童在室時における教室内温熱環境の空間分布	安岡(倉淵)
12	小泉 隆	1999 (H11)	論文博士	建築空間に取り込まれた太陽光が与える空間イメージと透過光面イメージの構造	鈴木
13	鈴木英之	1999 (H11)	課程博士	部材の途中まで鉄骨が存在するコンクリート系複合部材の構造性能に関する研究	松崎
14	森本 仁	1999 (H11)	論文博士	鉄筋コンクリート造柱と鉄骨造梁で構成される混合構造における柱貫通型柱・梁接合部の力学的挙動に関する研究	松崎
15	磯 雅人	2001 (H13)	課程博士	シート状連続繊維補強材で補強された袖壁付き鉄筋コンクリート造柱部材の構造性能評価に関する研究	松崎
16	杉山智昭	2002 (H14)	課程博士	非構造壁を内蔵する鉄筋コンクリート造架構の構造性能評価に関する研究	松崎
17	中野克彦	2002 (H14)	論文博士	プレキャスト鉄筋コンクリート構造における接合部の挙動と構造性能評価に関する研究	松崎

No.	氏名	授与年度	種別	博士論文名	指導者 (実質指導者)
18	中澤春生	2003 (H15)	課程博士	鉄筋コンクリート造外部柱梁接合部に機械式定着した梁主筋の定着機構に関する研究	松崎
19	渡辺英義	2003 (H15)	論文博士	曲げ降伏後のせん断破壊を考慮した鉄筋コンクリート建物の性能評価法に関する研究	松崎
20	市川尚紀	2005 (H17)	論文博士	都市河川白子川流域の水路跡をせせらぎ道として活用した雨水流出調整に関する研究	鈴木
21	栢木まどか	2006 (H18)	課程博士	関東大震災復興期の耐火耐震(RC造)建築の普及過程における復興建築助成株式会社と共同建築に関する研究	伊藤裕久
22	高橋 治	2006 (H18)	論文博士	減衰特性および各種依存性を考慮したブレース型オイルダンパーの開発と解析モデルに関する研究	松崎
23	山野裕美	2006 (H18)	論文博士	建築物における花粉汚染防止に関する基礎的研究	倉渕(吉澤)
24	嶋田 拓	2007 (H19)	課程博士	車いす使用者等を含む群集の避難流動特性に関する実験研究	直井
25	鳥海吉弘	2007 (H19)	論文博士*2	戸建住宅における機械換気システムの性能評価に関する研究	倉渕
26	吉川和秀	2007 (H19)	論文博士	高次モードを考慮した等価線形化法によるRC造建物の地震応答評価	松崎
27	野中俊宏	2009 (H21)	論文博士*2	密集住宅地における効果的な通風利用を目的とした開口部配置計画手法に関する研究	倉渕
28	大竹宏之	2010 (H22)	課程博士	個体領域の確保を考慮した室空間の規模計画手法に関する基礎的研究	直井
29	杉山経子	2012 (H24)	論文博士*2	学習院目白校地の復原と明治期における学校建築としての歴史的的位置づけに関する研究	伊藤裕久
30	飯山かほり	2012 (H24)	論文博士	FDD法の基礎理論の構築と地震で損傷した建物の振動モード特性	栗田

3-3. 成績最優秀賞・卒業制作（設計） 最優秀賞受賞者

一部・二部とも、学業成績最優秀者と、卒業制作（卒業設計、卒業計画）の最優秀作品について、表彰している。歴代の受賞者を挙げておく。なお、卒業年度は「年度」であり、卒業式・学位授与式のあった年ではない（表記年の翌年3月卒業・修了）。

成績順位としては、卒業研究着手時に3年次までの成績順位（単位取得科目の種類等を勘案した計算方式によるもの）が発表されているが、その後の履修は（特に成績上位者は）順位に影響することがまずないので、その順位によっている。一般教育科目と専門科目とでは成績順位が大きく逆転する場合があるので、それへの配慮として、専門科目だけの順位と、総合順位との両方に、優秀賞を授与した年度もある。一般教育科目の時間数を削減して専門科目を充実して行こうという傾向があった時代を象徴する出来事であったが、その方式は続かなかった。

卒業制作の場合は授賞に値するレベルの作品がないと判断した年度もある。教科目の点数から算出する成績順位については、そのようなケースはありえないが、第一部建築学科で1971年度卒業者に成績1位の該当者が無い。教室会議の記録には、単にどちらも「授与しないこととした」とされているだけで、理由は分からない。第二部建築学科では、通常の入学者と編入学者では成績の傾向が異なる場合があるため、卒業生をこの2グループに分けてそれぞれの成績優秀者を決めている年度がある。

卒業制作は、全般に低調で特に良い作品が無い年度には「該当者なし」とする場合がある。逆に、甲乙付け難い場合に複数作品に授与する場合もある。

第一部建築学科では故・浜田稔教授が残された基金を元に「浜田賞」として副賞を授与することとしたが、基金を使い切った後も副賞を出している。

年度	第一部		第二部	
	成績最優秀賞	卒業制作最優秀賞	成績最優秀賞	卒業設計最優秀賞
1965 (S40)		中村弘道		
1966 (S41)		猪川理郎		
1967 (S42)		(該当者なし)		
1968 (S43)		中西繁・友澤和雄 (共同)		
1969 (S44)	高田 一	岩城知宙・木村有作 (共同)		
1970 (S45)	小嶋美行	(該当者なし)		
1971 (S46)	(該当者なし)	(該当者なし)		
1972 (S47)	松塚展門	小嶋 健・木下正行 (共同)		
1973 (S48)	平沢 卓	北川一雄・藤原孝史 (共同)		
1974 (S49)	間下 将	(該当者なし)		
1975 (S50)	荒井真一郎	田村幸彦・吉田亮司 (共同) 堅田徹也・村上聡 (共同)		
1976 (S51)	渡辺朋之 (総合) 鳥居 洋 (専門)	唐鎌良光・香田寛美 (共同) 岸田香太郎・福島一郎 (共同) 鈴木清丈・鳥居 洋 (共同) 中出淳一・松尾 覚 (共同) 平林勇一 船久保宏明		
1977 (S52)	稲葉信子	(該当者なし)		
1978 (S53)	林 理	安藤 泰・勝目雅裕 (共同) 岡崎俊樹・高橋克巳 (共同) 今井崇行 矢吹豪通 富川桂二郎		
1979 (S54)	吉田裕之	壺岐 清 岩村由美子 須賀修彦 安田達雄 廣谷純彦		
1980 (S55)	松本博文	佐久間亮司 関口 彰	小林 睦	中西 功
1981 (S56)	梶 隆	水沼 均	北嶋 裕	藤野敏幸
1982 (S57)	坂本浩孝	(該当者なし)	山口総子	森崎 健

年度	第一部		第二部	
	成績最優秀賞	卒業制作最優秀賞	成績最優秀賞	卒業設計最優秀賞
1983 (S58)	細沼滋実	近藤剛啓	酒井和吉	島田康成
1984 (S59)	小林利和	増山哲也	佐藤秀幸	坂井 茂
1985 (S60)	上甲 孝	伊谷 峰	大沢 悟	石 光生
1986 (S61)	高橋稔宏	(該当者なし)	生田佳和	平田いずめ
1987 (S62)	郷田桃代	村井達也	橋本敏彦	小林裕治
1988 (S63)	河野賢一	池 一郎	吉田 建	三ツ江匡弘
1989 (H1)	渡辺 勲	山名善之	井沢淡紅恵	石川 涼
1990 (H2)	辰野 達	小野田智彦 中村 智 藤井俊洋	小林弘平	飯田 孝
1991 (H3)	野口 健	浅野卓郎 鴨下 清	石原 満	池田佳人 石原 満
1992 (H4)	伊藤佐恵	伊藤佐恵 市川尚紀 酒井一光 佐伯琢磨 矢口哲也	藤井幹子	藤井幹子
1993 (H5)	半田 悟	川辺直哉 山田高広	高山美咲緒	外尾幸洋 荘司新吾
1994 (H6)	堀上陽子	常磐純代	湯澤弘江	高野ひかり
1995 (H7)	熊谷和子	(該当者なし)	小林由佳	田沼 哲
1996 (H8)	真下恵子	広瀬 郁	佐々木あき	原田賢一
1997 (H9)	本田友一郎	(該当者なし)	清原俊彦	江藤由美子
1998 (H10)	内池智広	(該当者なし)	木村 麗	金田隆彦
1999 (H11)	沓名大介	堀部雄平	浅野 暁	西村当巨
2000 (H12)	小林美都	高橋慎一郎	倉岡 満	小坂香奈恵 山中 猛
2001 (H13)	山本 弦	(該当者なし)	小幡一隆 門池恵子	佐野健太
2002 (H14)	長谷川はる香	佐々木奈緒子	平山博子 吉田恵美	(該当者なし)
2003 (H15)	清田直子	大谷泰弘	小森千登里 高橋康代	實成康治
2004 (H16)	青山将也	虎尾亮太	立上智子 常山未央	常山未央
2005 (H17)	外村 光	坂巻直哉	原 翠 佐野智彦	斉藤洋介
2006 (H18)	新谷昌代	(該当者なし)	佐藤多恵子	岡田 麻里
2007 (H19)	福士 烈	富岡由貴	松浦郁実 平川雅章	安井身治
2008 (H20)	坂本 徹	清水忠昭	塚越阿希江 片桐貴子	田村 彩
2009 (H21)	藤井啓樹	橋本寛人	黒淵裕治	藏田啓嗣
2010 (H22)	堤南保子	大和田卓	佐藤陽子	原村陽一
2011 (H23)	森田美穂	野田啓介	箱崎文子	長岡潤一郎
2012 (H24)	谷 莞洋	高橋 卓	岡本小百合	鬼澤孝弘

3-4. 進路状況

1) 第一部建築学科および大学院修士課程の進路状況

大学が作成する各年度の卒業生名簿の進路先情報に基づいて、1971年度から10年ごとに集計を行ったものである。業種等の分類については以下に示す表の通りで、現在、大学が行っている進路の分類に概ね従っているが、実際にどんな職種なのか(ゼネコンでは設計と施工でコースを分けて採用している、等)は不明である。

学部第一部については、1971年には10%程度であった大学院進学割合が、年々増加し2011年には60%となっている。逆に、建設関連への就職は1971年の60%程度から15%程度に減少している。

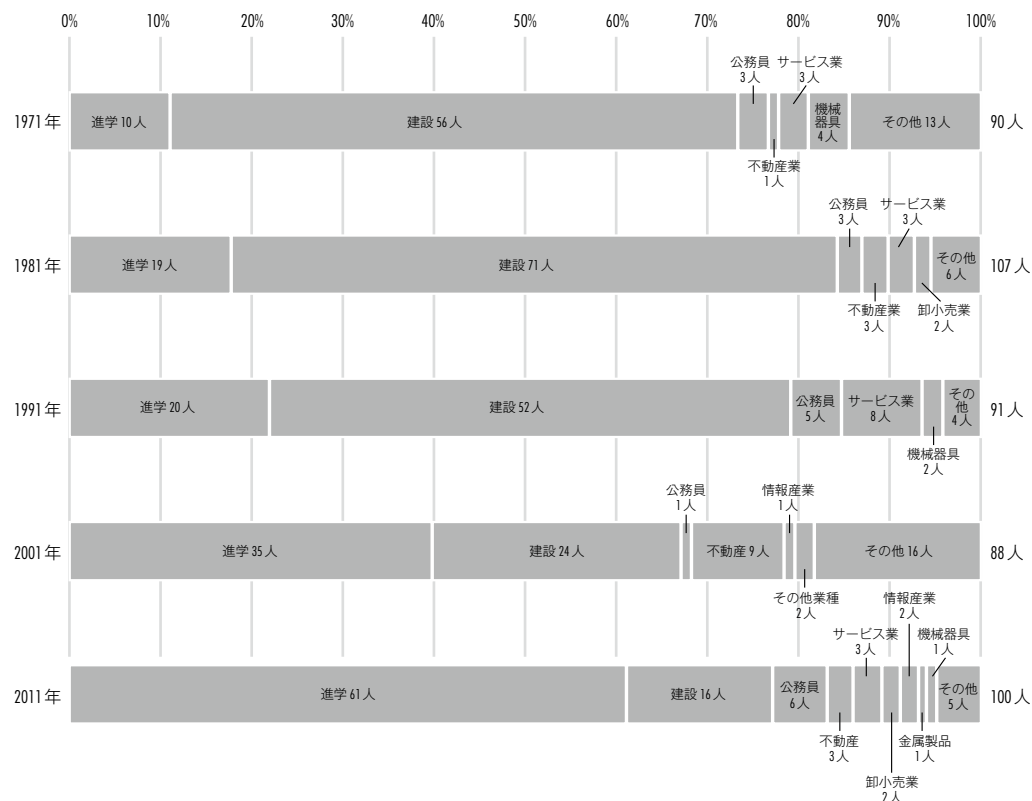
大学院生については、1971年、1981年は人数が少なく傾向は読み取りにくいだが、1991年以降では建設関連の割合がやや減少し、公務員や不動産(学部・大学院ともにバブル期に不動産が異常に増えたが10年毎の統計では2001年にまだその名残を表わしていると考えられる)、サービス業等が増加し、就職先も多様化していることがわかる。

大学院生が少なかった時期については、傾向を論ずるには困難だが、1981(昭和56)年のゼネコン激減については、2年程度遅れたオイルショックの影響でゼネコンが採用を絞り、施工については学部卒限定の求人であった事実を挙げておく必要がある。

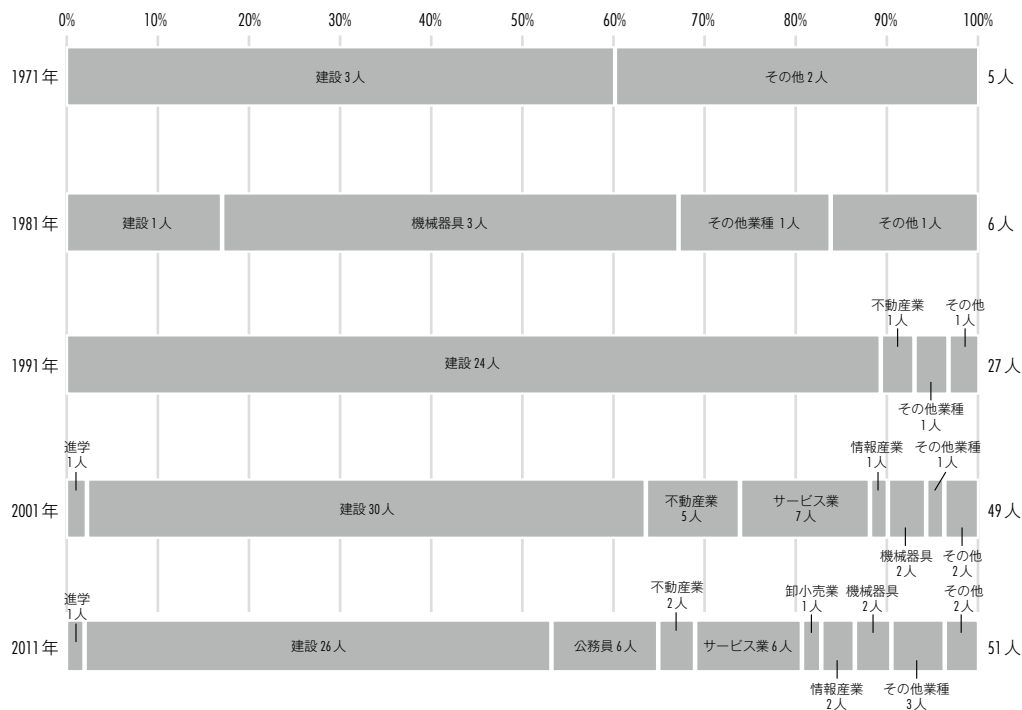
公務員は常にほぼ一定の比率と思われるが、安定指向や大学での報奨制度(国家一種合格で学費半年分相当の賞金、大学ランキングの向上を狙う)の後押しもあって、近年では大学院でも増えている。

進 学	大学院等
建 設	建設、設計・土木コンサルタント、設備工事、木材・木製品・家具等
公 務 員	地方公務員、国家公務員
不 動 産 業	不動産等
卸・小 売 業	卸・小売等
情 報 産 業	情報産業等
金 属 製 品	金属製品等
機 械 器 具	一般機械器具、電気機械器具、その他の製造業等
そ の 他 業 種	非営利団体、窯業・土石製品、医薬・化粧品、その他等
そ の 他	進学・留学予定者等

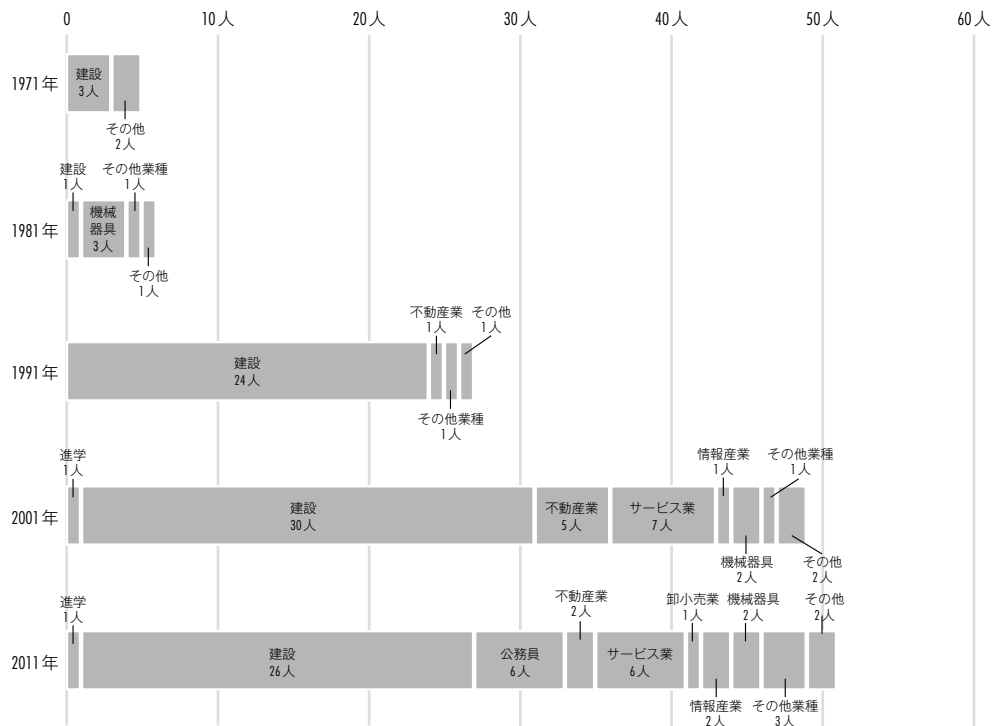
■学部・構成比



■大学院・構成比



■大学院・実数



2) 第二部建築学科の進路状況の特徴

第二部略史にも学生の進路に関する記述が含まれているが、ここでは改めて、第二部の進路状況の特徴、特に第一部との対比からみた特徴を以下にまとめる。

- ・第二部には、建築業界またはそれ以外の業界ですでに働いている社会人学生が多く（なかには、建築士資格をすでに有する者もいる）、このため、現職継続を選ぶ学生も多い。
- ・就職を希望する学生の進路は、いうまでもなく、建築業界全般からその周辺分野にまでわたっている。これは第一部と基本的には変わりはないが、就職率は、例年、第一部よりは若干低めである。
- ・進路として、大学院進学（本学あるいは他大学）を選ぶ学生が増えてきている。この学生達は、第一部からの進学者と一緒に、修士修了生としてその先の進路に臨むこととなる。
- ・就職活動の形が時代によって変わってきている。第二部も、初期のころには学校推薦制度が機能していたが、それが徐々に少なくなり、現在はほとんどが自由応募となっている。それも、最近はウェブ上で就職活動を展開する形が主流となったため、大学の情報ルート、すなわち就職課や学科の就職幹事の情報ルートに頼る率がかなり少なくなってきている。
- ・就職活動をする時期が、第一部と同様、時代を通じて徐々に早まってきており（3学年の後半から始まることが多い）、学業との関係が心配されている。